

精神科病院から「壁」破るパス

障害のある人と社会との壁を取り払いたい——。そんな目標に向かい、6年前、ある精神科病院が敷地内にフットサルコートをつくりました。全国でも珍しい取り組みです。スポーツのチカラは、患者にも、地域の人にも変化を生み出しています。(久永隆一)

敷地内にフットサルコート 鹿児島での挑戦

絶好のパスが来た。相手キーパーとの1対1。右足を振りぬき、ゴールネットを揺らした。「ナイスキュート!」。仲間が歓声と拍手を送る。得点を決めた上座彰さん(34)は、控えめに拳を握った。

3月5日、鹿児島県南部の南九州市。フットサルチーム「こだまユニテッド」が毎週木曜日の練習に励んでいた。フットサルは5人制のミニサッカーのような球技だ。2014年にできたチームの選手たちは「こだま病院」の精神科に通院治療している。うつ病や統合失調症などさまざまな病状を抱えている。

みるみる表情豊か 治療としての面も

上座さんは大学院卒業後、東京でシステムエンジニアとして働いていたが、長時間労働や不規則な勤務などが重なり、うつ病になった。

故郷・鹿児島に戻り、通院治療を受けている時にフットサルチームの存在を知った。小学生までサッカーを習っていたこともあって、関心を持った。遠征して出場した大会で得点を決め、自信になった。「案し



ドリブルでボールを運ぶ上座彰さん(右)。強烈な右足のシュートが武器だ=3月5日、鹿児島県南九州市

ソーシャルフットボール 全国2000人以上がプレー

精神障害のある人たちにとって08年以降、フットサルは身近なスポーツになりつつある。ソーシャルフットボールと呼ぶのが一般的だ。フットサルとルールが少し違う部分もあり、呼び方が異なる。例えば女性がチームに入る場合、6人でプレーできる。

NPO法人日本ソーシャルフットボール協会によると、海外ではイタリアやフランスなどで活発という。日本では、北海道から沖縄県まで160以上のチームがあり、選手も2千人を超えるという。チームの主体が治療する病院ごとであったり、そうでないケースもあったり様々。全国大会やワールドカップもある。

同協会の真庭大典副理事長によると、障害者のなかでも精神障害のある人がスポーツに取り組むのは遅かったという。レクリエーションの一環で軽い運動をすることはあったが、スポーツとは言えなかった。医療現場の「無理をさせてはいけない」といった意識も背景の一つにあったが、最近では当事者の自己肯定感の回復など治療目的もあって取り組む例が増えてきたという。

自信取り戻す患者 理解深める地域の人

悔しい。そういう感情を解放できる貴重な時間ですね。勝ちたいと思うようになって、生活に張り合いが出てきました。4月からは市役所職員として働き始め、新たな一歩を踏み出す。フットサルには、治療の側面もある。周りとながら、自信を少しずつ取り戻す場でもあり、練習中に、選手たちはみるみる表情が豊かになる。互いに声を掛け合うようにもなる。仲間になれる。練習の最後に必ず開くミーティングでは、チームメートのプレーのよかった点を挙げていくことで、自己肯定感にもつながる。

チーム結成は、こだま病院に14年5月に招いた精神科医の講演がきっかけだった。

岡村武彦さん。大阪府高槻市の新阿武山病院の医師で06年、先駆的にフットサルを取り入れたことで知られる。講演を聴いた病院スタッフが「うちの病院でも取り組みましょう」と、こだま病院の児玉圭院長に持ちかけた。

1人制のサッカーと比べ、人数でもできる。女性も一緒にプレーできる点も後押しした。計画は着々と進んだ。長年使

対戦相手のチーム 「僕らが変わった」

っていなかったテニスコートがあった。人工芝を敷き詰め、600万円をかけたフットサルコートは14年12月にできた。「ユニホーム総選挙」と題して、ユニホームのデザインを病院スタッフや患者から募集。チーム名は患者につけてもらい「こだまユニテッド」に決まった。

全国を見渡しても、敷地内に本格的なフットサルコートをもつ精神科病院は珍しい。

コートは病院外の人にも開放している。病院が毎年1回主催する「こだまカップ」で、こだまユニテッドと対戦した地元フットサルチーム「カラモエゼ」の児玉晃一さん(48)は「それまでのイメージと違いました。大して僕らと変わらないですよ。対戦して、僕らが変わられた。距離感が縮まりました。」

厚生労働省の統計によると、精神障害のある人は約419万人(17年)。厚労省は04年に示した改革ビジョンで「入院医療中心から地域生活中心へ」という方向性を打ち出した。精神障害のある人も、地域でも暮らす身近な存在になる傾向にあるものの、誤解も残る。

児玉院長は「講演で『怖い病福岡県などに遠征に行く。気じゃないですよ』と言う方も、一緒にプレーしてもらおう方が早い。地域の人の心に入っていく」と話す。

特別の診療報酬が得られるわけではない。精神疾患のある人たちでつくるチームは鹿児島県内にはほかにないという。数十万円の持ち出しが発生するが、